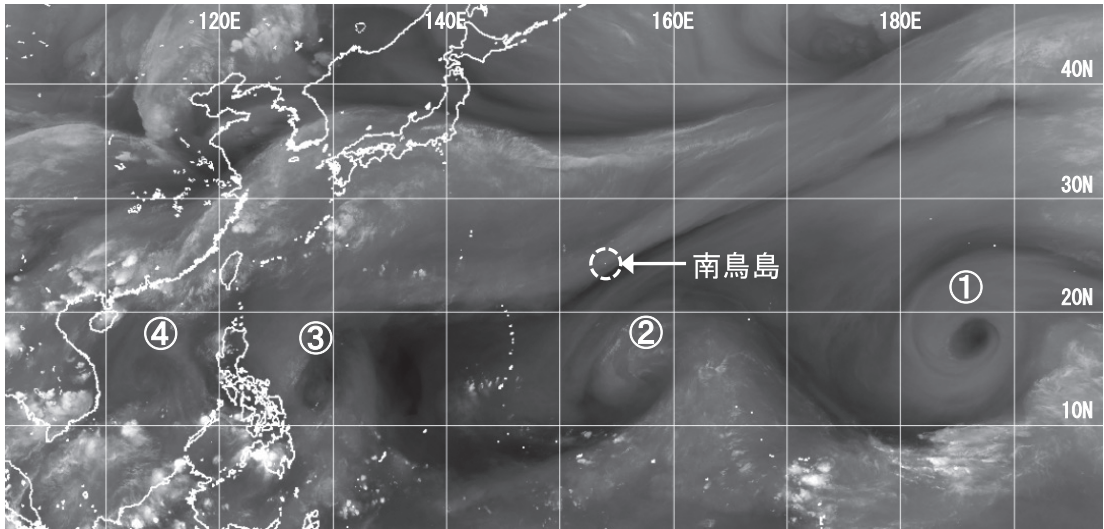


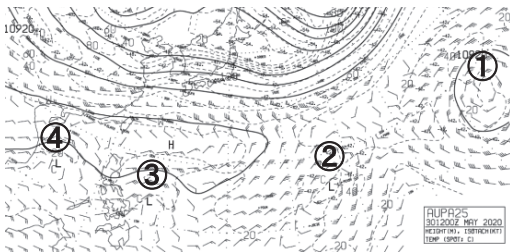


今月のひまわり画像—2020年5月

熱帯域の上層寒冷低気圧



第1図 2020年5月30日21時（日本時間）の北西太平洋の水蒸気画像（記号については本文参照）。



第2図 第1図と同時刻のアジア太平洋250hPa高度（実線）・気温・風（破線は等風速線）天気図。

第1図は、2020年5月30日21時（日本時間）の北西太平洋の水蒸気画像で、第2図は、第1図と同時刻のアジア太平洋250hPa高度・気温・風天気図である。北緯10度～20度、東経110度～西経170度の範囲には、①～④の4つの上層寒冷低気圧（UCL：Upper Cold Low）が存在していた。①は西経174度付近、②は東経158度付近、③は東経128度付近、④は東経115度付近にあって、①～③は、経度にして約30度（約3,000km）間隔で東西に並んでいた。

①と②の上層寒冷低気圧は、345Kの等温位面渦位

（図略）の推移から、5月16日～21日に南鳥島付近でトラフが深まって偏西風が南北に大きく蛇行し、21日ごろに切離して形成されたものである。なお、③と④の上層寒冷低気圧の起源は、等温位面渦位などの推移からは不明だった。

日本付近などの中緯度帯においては、上層寒冷低気圧の周辺、特に南東象限では、上層の寒気存在と下層の暖気の流入の影響で大気の状態が不安定となっており、対流活動が活発となり、局地的に大雨となることがある。一方、熱帯域においては、上層寒冷低気圧の影響で対流活動が活発になると、大雨のみならず台風の発生につながることもある。また、台風の周辺に上層寒冷低気圧が存在すると、台風の発達や勢力の維持に寄与することがある。このように、熱帯域の上層寒冷低気圧の動向を監視することは、防災上の観点からも重要となっている。

なお、熱帯域の上層寒冷低気圧は、寿命が長いことが多く、①と②の寒冷低気圧は、水蒸気画像で低気圧性循環が明瞭となってから、10日以上循環が維持されていた。

（気象庁予報部予報課 西 峰雄）